中学校国語科における「読むこと」の指導の工夫
―読みの視点を基にしたジグソー型学習を通して―

特別研修員　国語　神邉紗耶香(中学校教諭)

多様な読みの視点を基に文章を読み深めることができる生徒

手立て　読みの視点を基にしたジグソー型学習

個
自分なりの読みの捉え直し

太宰のメッセージとは（作品主題）
Ｓ１の所属グループ
人を信じることの大切さ。そして、友情や正義、愛、真実は、命にも代えられない、一番誇るべき宝であり、人を信じていれば、何かが変わるのだ。

Ｓ３：メロスは疲れ切って友達を裏切ろうとした。『人質』ではそんなシーンはなかった。「人は弱くあきらめそうになるが、苦労や困難を乗り越えることで強くなれる」と描きたかったのだと思う。

Ｓ２：王が山賊にメロスの命を奪うよう命令したような表現があることから、王も心のどこかでは、メロスが戻ってくると信じていたのではないかと思う。

クロストーク
各グループの読みを全体で交流

クロストーク

③構成　②登場人物

ジグソーグループ
異なる読みの視点を持った者同士による交流

④作者のしかけ　①題名

エキスパートグループ
同じ読みの視点を持った者同士による交流

エキスパートグループ

Ｓ４：『人質』では王の顔は「険悪」と書いてあったけど『走れメロス』では「蒼白」と書いてある。王を、心が冷めてしまった人を信じられない悲しい人として描きたかったんだと思う。

Ｓ１：『人質』は、友を助けるために走るという意味だが『走れメロス』は王に人を信じることの大切さを教えて、王を見返すという意味もあるのでは。「もっと恐ろしく大きなもののために走っているのだ」は王のためではないか。

個
自分なりの読み

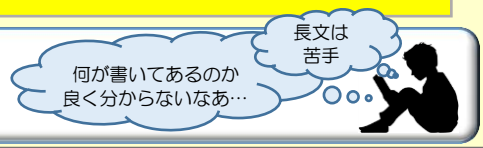
Ｓ１：『人質』は、単に友達の命を救うために走る物語だけど、『走れメロス』は友を助けて王を見返してやろうという物語だからこの題名にしたんだと思う。

『走れメロス』での読みの視点　※作品の特徴や生徒の実態（課題意識）によって3～4つに絞り込む

① **題名読み**・・・・・・・題名に隠された謎を探りながら読む
② **登場人物読み**・・・・・登場人物の描かれ方や人物像の変化を視点に読む
③ **構成読み**・・・・・・・起承転結の中で、書き換えられている場面を視点に読む
④ **作者のしかけ読み**・・・比喩などの表現技法や伏線、象徴などの表現上の工夫を視点に読む

一つを選んで担当する

生徒の実態：文章を想像しながら理解する力の不足
文章に対する「問い」を持った読みになっていない



成果
- ○ 読みの視点を基に、他者と協働で読むことにより、一つの読みの視点だけでは気付けなかった他者の目の付け所や新たな読みに気付き、文章の読み方を身に付けることができた。
- ○ この手立てにより、教師から与えられた問いに答えるために文章を読むのではなく、教室内の他者や作者自身と対話しながら、何度も作品を読み返し、自分なりの読みを変容させていく姿が見られた。

課題
- ○ 絞り込みから外れた読みの視点や、グループによる話合いの中で取り上げられない読みがあることに触れ、別の新たな読みの可能性があることを認識させておく必要がある。
- ○ この手立てのプロセスを丁寧に取り上げ、継続して指導していく必要がある。